

学習室

水無月と氷

—『小倉擬百人一首』『山邊赤人』と『大日本物産図会』
「北海道函館氷輸出之図」—

大内 瑞 恵

はじめに

六月。一年を十二ヶ月とするとちよど前半が過ぎるころである。また、旧暦六月を「水無月」という。その語源については諸説あるが、旧暦(太陰暦)六月は現在(新暦・太陽暦)の七月頃であり、季節は夏、猛暑の時節である。「氷」の看板が出るのもこの頃だろう。

本稿では、この水無月(旧暦六月)の風物「氷」に着目し、「小倉百人一首の享受」と「江戸の文化」に触れるとともに、現代のわれわれの生活への関連性を述べたいと思う。

一 『小倉擬百人一首』『山邊赤人』の雪

江戸時代後期の大判錦絵『小倉擬百人一首』は歌川広重・歌川国芳・歌川豊国(三代目)による百枚続きの作品である。そ

れぞれに柳下亭種員による解説が付される。その袋の記述により、弘化三年(一八四六)頃、江戸伊場仙(伊場屋仙三郎)による刊行と目される。

東洋大学附属図書館には百枚揃いが所蔵されており、図書館のホームページ「附属図書館所蔵貴重書デジタルコレクション」^(注1)からその一部が公開されている。また、旧蔵者である吉田幸一博士により翻刻・影印『古典聚英 浮世絵擬百人一首』が刊行



されている。^(注二) そのうちの通し番号四「山邊赤人」を見てみよう。

絵師は歌川国芳。国芳の落款の右上に見える名主の改印は「村松」の単印である。出版前に絵の内容を名主が改めたことを示す印を改印といい、月番により一人または複数の名主が担当する。廣岡由佳理氏によると、この印から天保十五年(一八四四)七月・弘化二年(一八四五)四月・同十二月に改めが行われたか^(注三) という。

天保十三年(一八四二)より数度に渡り改革の町触れが出され、歌舞伎役者の似顔を錦絵に描くことが禁じられた。『小倉擬百人一首』においても、岩切友里子氏は「百匁の内、名主単印の大部分は武者絵故事絵として疑問のない描写^(注四)」とし、後半部分、豊国(三代目)が参加する五二番目以降は役者似顔絵になっている^(注五) とし、具体的な役者似顔の推測を廣岡氏が行っており、天保の改革以後の役者似顔復興が指摘される(前述論文)。

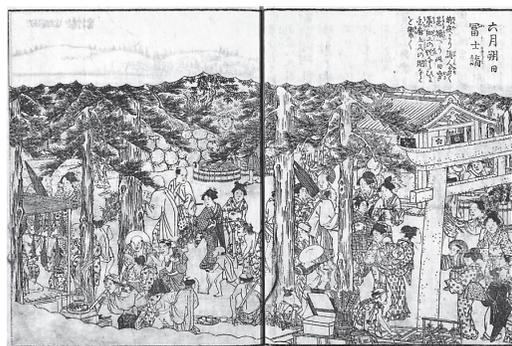
では、前半部分のこの「山邊赤人」は何を描いているのだろうか。

田子のうらにうち出て見れば白妙のふじのたか根に雪は
ふりつゝ、

湯嶋の宮居に遠からで紋瓦の梅鉢も由あり。駒込の富士に
いと近くて園に出せる暑中の雪も又縁ありといふべきのみ。
柳下亭種員筆記(句点は稿者による)

この種員の文を検証してみよう。

① 湯嶋の宮居 江戸で湯島と言えば湯島天満宮のこと。『修



紫田舎源氏』卷十九序「湯島の宮居は右に遠く、榎寺の
仏閣は左に近し」(天保丙申孟春発行 柳亭種彦)。

② 紋瓦の梅鉢 瓦に押された紋を紋瓦という。梅鉢といえ

ば、菅原道真(天満宮)及び、加賀藩前田家の家紋が有名。

③ 駒込の富士 駒込は古くは「こまごみ」と呼称された。

天保五年(一八三四)〜七年刊『江戸名所図会』^(注五)「富士浅間社」に次のように記される。

富士浅間社 同所(駒込)にあり。祭神此花開耶媛一坐
なり。往古靈瑞あるに仍て是を鎮坐といへり。当社昔
は本郷加州侯の後園にありしが、寛永年中今の地に遷
さる。毎歳六月朔日祭禮にて前夜より詣人多く道路に
充り。此地の産物として麦藁細工の蛇ならびに圓扇五

色の網などを鬻ぐ。(句読点・濁点は稿者による)

富士浅間社は、もともと本郷にあったが、その地が加賀藩前田家上屋敷となったため、寛永年間に駒込に移転、駒込富士と呼ばれたという。富士詣でが流行した江戸中期、実際の富士山に詣でる代わりにこの駒込富士や浅草富士などに詣でることが盛んに行われた。

④ 暑中の雪 『東都歳時記』「六月 朔日」の条に次の記述がある。(注六)

○氷室御祝儀 加州侯御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり。町屋にても、旧年寒水を以て製したる餅を食して、これに比らふ。

再び、加賀藩の話が登場する。加賀藩邸に氷室があり、六月朔日には將軍家に氷を献上した。六月朔日の氷献上は、もともと朝廷の儀式で、古代、氷室から氷が運ばれたことに始まる。

『枕草子』の「削り氷に甘葛あまづら」の記述が有名であろう。『慶長日件録』によると慶長十一年(一六〇六)六月一日に徳川家康が美濃伊吹山の氷を朝廷へ献上したという。(注七)江戸時代後期には『東都歳時記』に記されるように、加賀藩の將軍家への氷献上が広く伝えられていたようである。これを「暑中の雪」となぞらえたものだろう。

ここで、『小倉擬百人一首』「山邊赤人」を見直してみよう。湯島天満宮―梅鉢の紋―加賀前田家。駒込の富士―本郷加賀藩邸―暑中の雪(氷献上)。

それぞれ「由あり」「縁あり」と加賀藩と富士・雪の連想から、赤人歌に響かせる。画中の右の女性の重箱の中には雪(水)。そして、左の娘が手にしている物は駒込富士の名物蕁細工の蛇である。歌に詠まれた「富士と雪」を巧みに取り込んだ趣向となっている。

ただし夏の盛りの氷はやはり貴重品であって、『東都歳時記』に記されるように、町人は氷に擬えた「餅」を食した。この風習は各地にあり、京都の菓子「水無月」(ういろいろに小豆を乗せた三角形の菓子)へとつながるが、またそれは別稿としたい。

さて、明治期に江戸時代を振り返った回想録『名ごりの夢』に氷が下賜される話がある。「なんでもその氷はお城から諸大名や旗本等へ下りたのでございまして、一般の人たちへ氷がゆきわたるようになりましたのは明治になってからではないでしょうか。」(注八)

その明治時代に氷が行き渡るようになったきっかけも錦絵で見ることができ。

二『大日本物産図会』「北海道函館氷輸出之図」

本学附属図書館蔵のこの錦絵一枚は、明治十年(一八七七)の第一回内国勸業博覧会に合わせて販売された。日本各地の物産を紹介するために作成されたシリーズもので、三代歌川広重の作。



解説(画賛)を見てみよう。(句読点は稿者による)

氷は嚴寒^{ゲンカン}の節^{セツ}北海道^{ゴレウカク}五稜岳^{ホリ}の氷たるを、鋸^{ノコギリ}を以て凡^{ソノ}そ目方^{メカタ}二十^ニメ目^メばかりに引^{ヒキ}わり、二個^{フタツ}合^アして雪車^{ユキクルマ}に乗^ノせ函館^{ハコダテ}漆^シを運^{ウン}転^{テン}なし、大鋸屑^{オガクズ}にて覆^{オホ}ひ、箱^{ハコ}に入れ密封^{フツウ}じて横濱^{ヨコハマ}東京^{トウキョウ}その外諸国^{ウチノコク}へ輸出^{ユツツ}して氷蔵^{ヒョウザ}に納^{ノウ}め暑中^{ショチュウ}にいだして販賣^{ハンバイ}す。

十九世紀、アメリカ東海岸やノルウェイなどから切り出された氷は世界中に輸出されていた(ice trade, frozen water trade)。日本には横浜開港以後、居留外国人の飲料用・医療用としてボストン氷が入荷していたが、たいへん高価であった。そこで、横浜の輸入商中川嘉兵衛は、医師のヘボン(J.C.Hepburn)などから知識を得て、日本国内での採水事業のため各地を調査し、明

治四年(一八七二)に函館氷を売り出した。良質で廉価な函館氷はやがてボストン氷に代わるものとして、第一回内国勸業博覧会では龍紋褒章を受賞。これをきっかけに函館氷は日本各地へ販路を広げていった。

黄遵憲『日本雜事詩』(明治十二年刊)「函館氷」^(注九)では「銀花を敲^{たた}碎^{くだ}き鏡菱^{カウシロウ}を剥^はぐ、瑩瑩^{えいえい}として光映^{みつ}え玉壺^{みずいれ}に澄^すむ、暑中清涼散^{ショチュウセイリョウサン}を服するに勝る、争^あい争^あい買^かう舶来^{ハクライ}の函館氷」と七言絶句に詠まれている。また、『花月新誌』明治十四年(一八八二)に「この頃は削^けった氷にじかに白砂糖^{シロコウ}をかけたものらしい^(注一〇)」という。

まとめ

江戸時代に珍重された「六月一日の水」、そして明治期に入り氷が普及するきっかけとなる「函館氷」を二枚の絵から探ってみた。現代に続く夏の風物詩である「氷」。これ一つをとって、宮中の儀礼から、富士山信仰、錦絵と天保の改革、江戸から明治への変化など、さまざまな視点によって異なる切り口が見えてくる。それらはみな現代の文化につながっているといえよう。授業を受けるに際し、文字資料や錦絵や古地図など資料を駆使して、謎解きを楽しんでいただきたいと切に願う。

資料の閲覧利用をご許可くださいました各機関に厚く御礼申し上げます。

〈注〉

- 一 東洋大学附属図書館所蔵貴重書デジタルコレクション
<http://www.toyo.ac.jp/site/collection1/nazora.html>
- 二 吉田幸一『古典聚英 浮世絵擬百人一首』(二〇〇二年 笠間書院)
- 三 廣岡由佳理『小倉擬百人一首』と天保の改革(『浮世絵芸術』一六四号 二〇一二年)。改印については、石井研堂『錦絵の改印の考証』(一九二〇年初版、一九九四年新版 芸艸堂)をはじめ、佐藤悟「名主双印試考」(『浮世絵芸術』一二九号 一九九八年)。
- 四 岩切友里子「天保改革と浮世絵国芳の揃物を中心にした錦絵の動向と名主単印試考付、「シタ売」印についての私見」(『浮世絵芸術』一四三号 二〇〇一年)
- 五 斎藤斎藤長秋・莞斎・月岑編、長谷川雪旦画『江戸名所図会』(ちくま学芸文庫『新訂 江戸名所図会』一九九七年 筑摩書房)。画像は国立国会図書館蔵『江戸名所図会』(第七巻 第十五冊)による。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563394>
- 六 『新訂 東都歳時記』(ちくま学芸文庫 二〇〇一年)
- 七 江戸時代初期の公家舟橋秀賢の日記。『史料纂集 慶長日件録』(一九九六年 続群書類従完成会)
- 八 今泉みね述『名ごりの夢 蘭医桂川家に生れて』(東洋文庫 一九六三年 平凡社)
- 九 黄遵憲『日本雑事詩』実藤惠秀・豊田穰訳(東洋文庫 一九六八年 平凡社)
- 一〇 森銑三『明治東京逸聞史』(森銑三著作集 続編 第十卷 一九九四年 中央公論社)

— おおうち みずえ・文学部非常勤講師 —